

お茶の水女子大学の行方 いまだ道遠し 男女共同参画

本田 和子 学長

男女共同参画社会基本法の制定は、女性たちの前にも、当然の権利としての社会参画を保障し他方向への可能性に道を開いた。その意味では、関係者たちの永年の努力を讃えるに吝かではない。しかし、国立大学協会の調査の示すところ、国立大学における女性教官の割合は、いまだ、一〇パーセントに満たない。二〇パーセントを越えているのは、僅かに本学と奈良女子大学の二校に過ぎないとは。

これに対しては、女性教官不足の要因として、公募の際に優秀な女性候補者が少ないことを理由に上げる向きがある。つまり、特別に差別しているわけではないが、「選考の対象となる候補者の少なさ」が原因だとするのである。しかし、学部学生の男女比を見るなら、特定の学部は別として、一般に女子学生の在籍率が上昇の一途を辿っていることは瞭然である。しかも、彼女たちの中から大学院に進学し、研究者への道を志す人たちの数も必ずしも少ないとは言えないのだ。彼女たちは、概して勤勉な努力家であり、後期課程を終えたときの学位請求論文にも優れたものが多く、研究者の資質能力に関して、巷間に云々されるような特段の性差は見いだせないということらしい。

とすれば、国立大学が女性教官採用に消極的な原因はどこにあるというのだろうか。つまり、女性候補者がいるにもかかわらず、彼



本田学長

女たちが採用されにくいのは、一体、何に由来するのだろうか。その最大の原因として、教官集団の「意識改革」の遅れが指摘されている。たとえば、女性はハードな実験等に不適切とする研究者観、あるいは、女性は慎重すぎて創造的・先端的な研究に向かないとする女性観、等々。どうやら、女性研究者に仮託されるイメージは、いまだ、旧態を脱し切れていないらしい。

さて、ならば、私たちは、ここで声を上げねばならない。「それだから、女子大学が必要なのだ」と。研究者採択の不均衡に関して、仮に、女性候補者の少なさが要因ならば、「女性」を特化して研究者を育てる機関が必要である。ハードな実験環境が女性に不都合なら、女子大学は、よりよい環境設定を工夫する実験場所として存在せねばならない。そして、その実験結果は、男性研究者にとってもプラスの研究環境であると証明して見せる必要がある。また、

創造的・先端的な研究が女性に不都合と見られているなら、そうした俗説の可否を確かめる場としても女子大の存在意義は小さくない。私どもの国は、既に男女共同参画社会基本法を設定し、それを承認し推進することを言明している。それを真に実現しようとするなら、先に上げたように、女性の相応しい用い方に関して、あるいは、男女間の均衡・不均衡に関して、それらの是非を確かめるべく実験の場が必要となる。とすれば、いま、女子大学の存在意義は、以前にましてより確かなものになりつつあると言つことが出来る。

生活科学部近況

生活科学部長 本間 清一



生活科学部 本間清一 生活科学部 本間清一 生活科学部 本間清一

総合研究棟一号館が出来上がった。八階建てである。ここには生活科学部の理系・実験系である生活環境

学科三講座と生活環境研究センターの研究室が移り住む。生活科学部本館は昭和七年竣工した。震災への備えから床や壁も殊更厚く出来ており、

水道管を通す為に床下のコンクリートに穴を開ける作業を請け負った工事人は何れも手間で賃に全く合わない分厚さだと文句を言った。しかし、多量のエネルギーを消費し、機器や設備を時代の変化に合わせて絶えず更新する理系の研究が本館の建物をこれ以上痛め付けることはできなくなっていた。良い時に研究棟が建ったと思う。

研究棟の実験室が多様な用途に対応できる様、壁の仕切りが変更でき、人の通る時のみ廊下・階段を照明し、水道・排水・電気・情報系統は保守がし易いよう配管スペースに纏められている。空調は冷房・暖房ともガスを使い、必要な時に部屋毎に冷暖の空気が吹き出す事になるらしい。研究棟のエネルギー消費を抑制し、システムの維持を優先した設

計である。建物の住人の更なる省エネの努力が問われる。その努力が配分研究費の増加となって戻って来ることを期待したい。

生活科学部本館には生活科学部文系の人間生活学科に所属する発達臨床心理学講座・生活社会科学講座・生活文化化学講座の研究室と生活科学部の授業の為の教室・演習室などのスペースになる。これらの三講座の研究対象は人間にまつわるもので広い。人の生涯にわたる発達の在り方、心の問題がある。更に、子ども、家族、高齢者、女性、消費者などの具体的な人間像の生活に根ざした課題設定やそれらの文化事象としての分析である。それにより生活の質を軸にした「人間共生」の価値を創造しようとする。

COEに採択された誕生から死にいたる人の心の問題を解決する事もテーマの一つである。本学部の前身である家政学部の児童学科では真つ向から「子ども」に関するテーマが研究に取り上げられた。今再び子ども・家族・家庭が問い直されている。平成十五年度から「子ども発達教育研究センター」が、文部科学省が正式に認めた組織として本学で発足する。人間生活学科の教員・学生は同センターの活動を専門領域の延長として捉え、密接な関係をもつて勉強に活用も出来よう。同センターは、附属学校園はもとより地元・社会と広く学外にも接点を持ち、「子ども」を多面的に研究し、実際に起こる問題に対処しようとするものである。

生活科学部の勉強は生活の知恵を科学すること、女性に必要な・便利な新たな産業の立ち

上げや社会的サービスをも提言できる時代になった。

さて、生活科学部本館は相当手を入れないと今後の用途に耐えないので本年夏頃から全館改修が計画されている。改修に際し女高師のよすがを伝える部分の保存には予算額にも拠るが極力配慮がなされよう。正面玄関を境にし東西に二分して、まず西側（理学部側）を本年度に、次いで予算上未定であるが平成十六年度に東側（幼稚園側）の改修工事が予定される。理系の研究室移動により空いた分を利用して、学科の教官はその都度工事をしている側面に研究室を移動させる。三年間に二〜三回の引越しをする教官もあるかも知れない、「評価の時代」にあつてまことにお気の毒である。

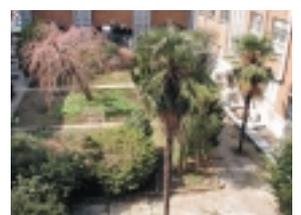
生活科学部本館は本学最古の建物、十分にお役目を果たした年齢である。建物の佇まいを保存する観点から外観を変えずに機能向上を目指した内部の大改修が予定される。手厚く育成された女高師の遺物は何度かの改修で残り少なくなった。階段教室（二〇一室）



階段教室の当時の201号室、階段教室の据え上げ式椅子

材できつちりと作られており、四八名の学生と先生が緊張感をもって話ができる空間である。標本を陳列保存した欧米の伝統校によく

見る中二階のギャラリーはもはや無い。微音堂前の左右の廊下は耐震設計で柱が緻密に並ぶので遠近感をつくりだす。長い廊下に見えるが、歩くと近い。



本館西側中庭

微音堂で二分されている中庭は風だまりで、夏は各窓から風が通り抜けて涼しい。床は長時間立ち仕事をしても疲れが少ない材料であるが、今では受験生がびっくりするうぐいす張り、学生には先生がやってくるのを察知できる新機能でもある。

かつて大学の建物毎に宿直当番を置いて、火災や盗難、事故の発生に対処出来る様になっていた時代がある。平成初期迄本学も続いた気がする。本館には古い建物なるが故に、深夜見回りの宿直者を困らせた「おぼけ」の出没が噂される場所（複数）があった。今度の工事でおぼけも住処を追われるのか、それとも改修で居心地が良くなりもつと出て来るのか、深夜まで居ると私も出て来そうな気がしてしまう。ミステリーも建物の深夜のアクセサリーである。

最後に、本学部から大学院に進学する次の二人の学生さんが留学することになった。田中絵梨（生活工学講座）さんはドイツ学術交流会の奨学金を受けて、空調関係の勉強にドイツの建築物理学研究所へ。田中恵理子（食物科学講座）さんは本学の国際交流制度に基づき実践栄養学の勉強にオーストラリアのモナシユ大学へ行く。帰国時の報告会が楽しみである。